地方都市におけるコワーキングスペースの空間構成と交流創出
- 愛知県瀬戸市を対象として -

指導教員　加茂　紀和子　教授　　稲垣穂高

1. 研究の背景と目的　コワーキングスペース（以下 CWS と表記）とは、異なる業種の利用者達が空間を共有して仕事を行う場所である。日本において CWS という名称が初めて使用されたのは 2010 年であり、その後全国に普及した。近年では、COVID-19 やネット環境の普及等、社会状況の変化によりその役割・形態・コンセプト・立地は多様化している。そのような状況下で 2019～2022 年においては、主要都市部だけでなく地方都市でも CWS の増加傾向がみられた[1)]。また地方都市の CWS では、交流や協働の創出、地方創生といったコンセプトについてホームページに明記した事例が複数確認でき（図 1）、今後のまちづくりに寄与する役割を担う意識が感じられる。現在、人口減少が加速する地方の市町村で人々が活きつづける環境をつくる手がかりの 1 つとして CWS の可能性が考えられる。そこで本研究では CWS の空間の構成要素、需要と運営状況、交流創出、地域との関係性を読み解いて得た知見をもとに、これからの CWS のあり方を提案することを目的とする。

2. 研究対象　中部・東海地方の地方都市（人口 10 万人以下の市町村）に分布する CWS について、インターネット検索によりホームページ等を閲覧することができ、現在運営されていることが確認可能な 88 事例を抽出し、本調査の対象とした。

3. 研究方法と概要　アンケート調査および実地調査、インターネットによる事例調査を用いて地方都市の CWS（一部 CWS の機能を有したシェアオフィスも含む）の現状、空間要素、運営状況と交流創出、立地と外部との関係性を明らかにすると共に、得られた調査結果を活用して敷地を選定し CWS の設計計画に取り組む。

4. 地方における CWS の現状　3. に示す方法で調査を行い、主に『CWS の空間構成要素』と『交流の状況』について分析を行った。アンケート調査では対象とした 88 事例の内 30 事例から回答を得られた。

4-1. 地方都市の CWS の空間構成要素　調査により確認できた 9 種類の空間要素とその空間を保有する事例の数・割合を図 2 に示す。加えて、特徴的な空間として、景観が見える空間や地域・仕事の情報が集まる空間、産業もしくは文化に関わる空間が見られ、それぞれ約半数の事例で設けられていた（図 3）。このことから地方都市の CWS は、景観、情報、産業と文化への意識が高いことが考えられる。また、

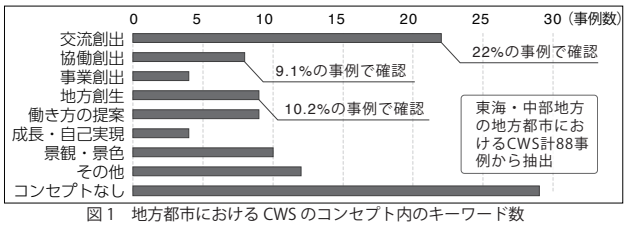

図 1　地方都市における CWS のコンセプト内のキーワード数

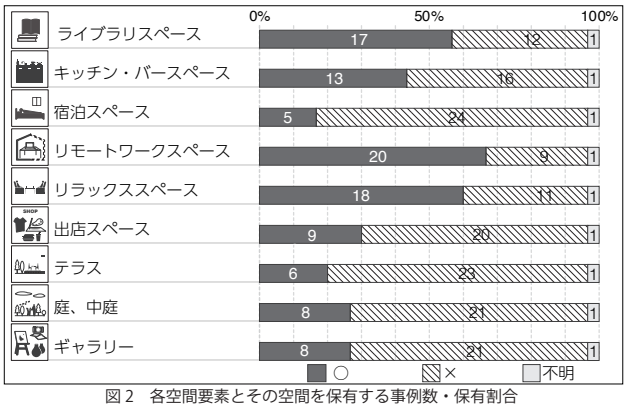

図 2　各空間要素とその空間を保有する事例数・保有割合

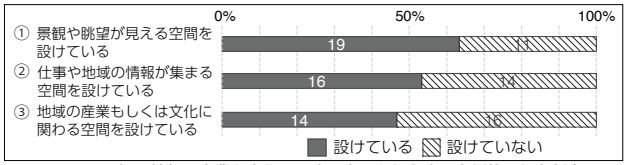

図 3　景観・情報・産業と文化に関する空間を保有する事例数・保有割合

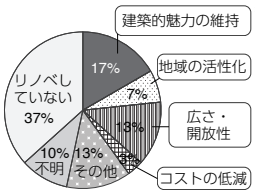

図 4　既存建築のリノベーションをして活用しているかについてとその目的

表 1　既存建築の活用について（記述回答から抜粋）

事例略称	既存建築を活かした空間の特徴・魅力
CT	木造のよさ。景観のよさ。
AC	既存建築の空き部屋活用のため最小限のリフォームをして和風空間を保った。
SS	休眠施設の復活により街が活性化する。
MW	築150年の古民家をリノベーション、まちに価値として残る空間・建物とする。構造材を見せる工夫。
TS	改装を最低限にして、イニシャルコストを抑えている

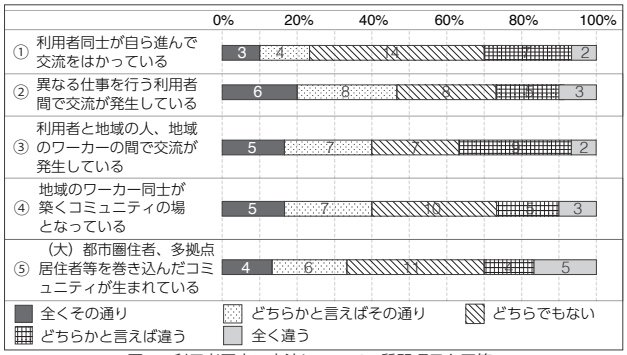

図 5　利用者同士の交流についての質問項目と回答

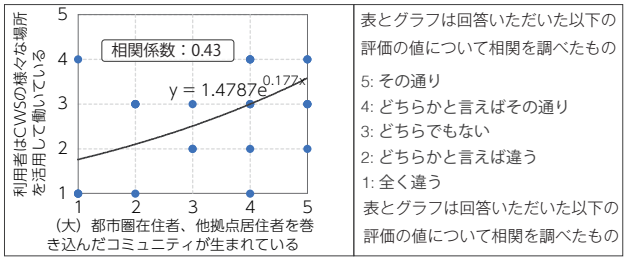

図 6　交流に関する質問項目と空間要素に関する質問項目の相関性について

Spatial Design and Community Engagement of Co-working Spaces in Provincial Cities
～Case Study of Seto City,Aichi Prefecture～　　Hodaka INAGAKI

既存建築をリノベーション・用途変更している CWS は 30 事例中 19 事例（63%）であり（図 4)、その理由として「休眠施設の復活により街が活性化する」や「築 150 年の古民家をリノベーション、まちに価値として残る空間・建物とする」、「改装を最低限にしてイニシャルコストを抑える」という意見が記述されていた (表 1)。

4-2. 交流の状況　利用者同士の交流について図 5 に示す。異なる仕事を行う利用者間でのコミュニケーションについては半数近くの 14 事例（46.7%）で見られることが読み取れた。

4-3. 交流創出に関係する空間要素・空間の利用状態　アンケート調査の結果から相関分析等を用いて交流創出・利用者数に対する空間要素・空間の利用状態を分析した。交流に関する質問項目と空間要素に関する質問項目の相関性を図 6 に、空間要素の有無と交流の状況について図 7 に示す。利用者が CWS の様々な場所を活用して働いている状態の事例で利用者同士の交流が発生している割合が大きいことが読み取れた。また地域の情報・仕事の情報が集まる空間と地域の産業もしくは文化に関わる空間を保有している事例は交流創出が発生している割合が大きいことが読み取れた。

4-4. 立地及び外部との関係についての調査　アンケート調査の回答をいただいた 30 事例の CWS について、その立地図、ファサード写真等のデータシートを作成し（図 8)、立地（最寄駅までの距離や近接して存在する空間・施設機能)、各事例の外部空間との関係性について明らかにした。30 事例の CWS の内 14 事例（46.7%）が歩行者用道路・一般道路に面しており、かつファサードを通して内部が外空間から明確に視認できる状態であった（図 9)。またこれらの CWS では 1 ヶ月の平均利用者数が 225.96 人であり、それ以外の事例に対し大幅に多いことが読み取れた（図 10)。CWS から最寄駅までの距離について、最寄駅から 1000m 以内が 30 事例中 17 事例（56.7%）であり、過半の事例が立地していることが分かった（図 11)。

5. まとめと展開　分析にて景観や情報、産業や文化に対して意識を持つ CWS の空間を示し、また複数の地方都市の CWS で交流が生まれている状況を明らかにした。調査を踏まえ、地方都市の CWS において「交流創出に繋がる空間要素」、「地域の価値に繋がる空間要素」、「外空間と人に繋がる空間要素」となる可能性を持つ空間の状態と性質を示す（図 12)。これらを活用し、人と人、人と地域を繋ぎ、地域に価値を生む CWS の試作を行う。試作における敷地は、継続的な人口減少で人口が 10 万人に近づく地方都市である愛知県瀬戸市から選定することとする。

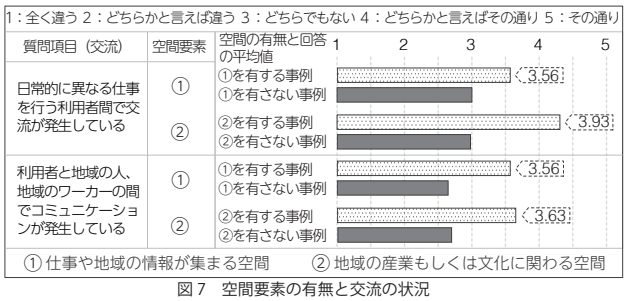

図 7　空間要素の有無と交流の状況

図 8　CWS の外部空間との関係性と立地の分析表（例）

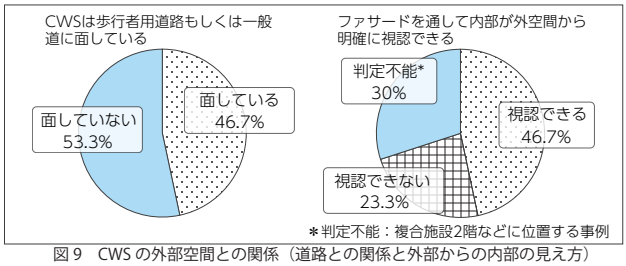

図 9　CWS の外部空間との関係（道路との関係と外部からの内部の見え方）

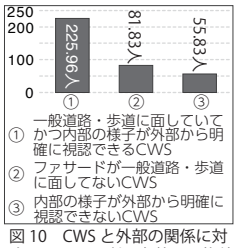

図 10　CWS と外部の関係に対する 1 ヶ月の利用者数の平均値

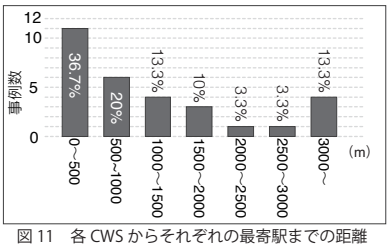

図 11　各 CWS からそれぞれの最寄駅までの距離

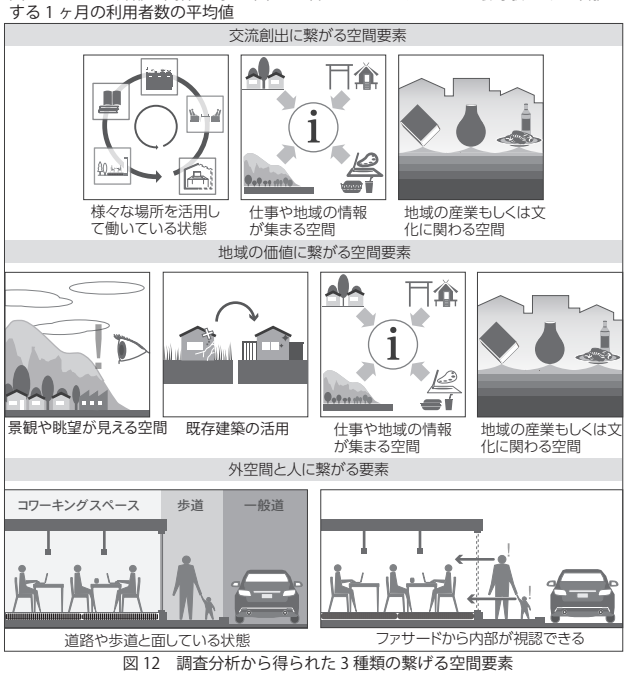

図 12　調査分析から得られた 3 種類の繋げる空間要素

6. 愛知県瀬戸市の現状　愛知県瀬戸市は平安時代から続く瀬戸焼の産地である。中心街には歴史ある商店街等が立地し、窯垣や陶土採掘場、窯元やギャラリーなど地域固有の風景や産業、文化が残る。また名古屋市の中区栄駅に直通する名鉄瀬戸線の終点駅、尾張瀬戸駅が位置する。一方で、人の繋がりが希薄化し街の空洞化や日常の活気が失われている状態が進行している（表 2）。

7．敷地の選定：愛知県瀬戸市旧瀬戸村地域　選定は、CWS の立地及び外部との関係の調査の結果を参考とする。最寄駅との距離が 1000m 以下であり、空き家・空き地の数と割合が町村の中でも高く、地域固有の景色や産業・文化が特に視覚的に表れている旧瀬戸村地域湯之根町・宮里町の区域を敷地の選択範囲とし（図 13）、その中から連続的に存在する空き家及び空き地を 2 箇所選定した（図 14）。

7-1.SITE1 の詳細　明治時代に建てられた工房が空き家となったものがあり、本設計に活用する。また、窯垣を使用して造成された土地も存在し、瀬戸的風景が多く残っている。

7-2.SITE2 の詳細　接道のない複数の空き地であり、いくつかの造成レベルや傾斜のある奥まった敷地である。窯垣が点在し、また敷地北西より南東方向に向かって、街の風景が広がる。

8. ターゲットの決定　アンケート調査で行った地方都市の CWS における利用者の種類に関する調査と瀬戸市に既に存在する CWS の利用者を図 15 に示す。本提案におけるターゲットを地元ワーカー、名古屋在住のワーカー、多拠点居住者、観光客とする。

9. 全体計画：働・暮・観を繋ぐ半公共的コワーキングスペースの提案　本提案は 5. で示した空間要素を活用し、ワーカー同士、ワーカーと瀬戸に存在する暮らしや観光に繋がり及び新しい流れを生むことを目的とする。そのため敷地周辺の動線や地域の観光・娯楽・歴史・景観スポットに人を導くような空間性を持つ CWS を設計する。また建築空間の中に、4-1 で示した 9 種類の CWS の空間構成要素を配置し、働く空間に多様な選択肢をつくる。また周囲の地域特有の風景に対して開く形とする（図 16）。全体計画のアイソメ図と各空間のシーンを図 17 に示す。

9-1.SITE 1 の設計：歴史的風景の中で働く空間　新築する部分は「外空間と人に繋がる要素」よりファサードが道路に接するように CWS を設計し道路側から人々を誘引する効果をつくる。また、屋根や開口の形状を周囲の建物や地形の角度を参考に決定することで建物を馴染ませる。敷地内では窯垣に対して開いた空間とすると共に、もとあった敷地内の動線を強調する形で建築を展開する。既存の旧工房は梁や柱等の骨組みを残して改築し、キッチン・カフェ

表 2　瀬戸の CWS 運営者に対するヒアリング調査の質問と回答（記述回答から抜粋）

瀬戸に必要なCWS機能は？	地域は都市と異なりコミュニティの数が少なく、それらが繋がるきっかけもどんどん減少している。そのため、人を繋げるコミュニティを混ぜていくというような機能は求められる機能だと考える。
CWSのギャラリーに需要はあるか？	需要はあると思う。ただし、そこに来て陶芸家やアーティストにどのようなメリットがあるか、どのような関係性が作れる場所であるか、それらを示す必要がある。
瀬戸の現状についてどう感じるか？	商店街の店舗や外装が新しくなり観光の対象になり始めていると思う。

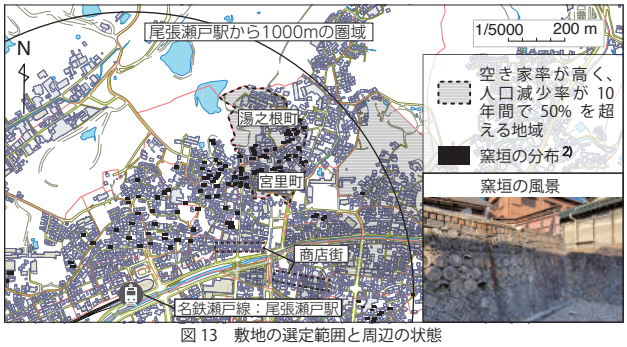

図 13　敷地の選定範囲と周辺の状態

図 14　敷地および周辺の図・地形図

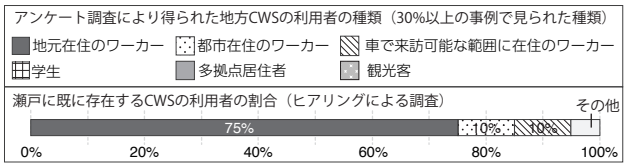

図 15　地方都市における利用者の種類と瀬戸市に既に存在する CWS の利用者

図 16　全体計画のダイアグラム

とメインオフィス・作業室・ギャラリーとする。棚等家具には既存建築解体時に生じた材を活用する。

9-2.SITE2 の設計：街の道と暮らしがある CWS　人と人、人と地域の繋がりを生む動線的な空間の中に焼き物体験やイベントに使用できる空間、都市在住のワーカー・多拠点居住者のための宿泊機能、契約利用により複数人で利用可能なオフィス空間を作り、それ以外の空間をライブラリ（まちの本棚）、リラックススペース、オープンなワークスペース、景観を楽しむ空間として地域に開放する。その他中心部の広場には、焼き物体験で制作したものを焼く窯がある。また、リラックスしたりお店を出したい利用者の出店スペース・等自由に活用される。

10. まとめ　設計計画では CWS を働く場所としてだけではなく、地域や観光を巻き込む動線的な空間として街に開くことで交流創出や活発な情報共有、多様な働く場所の提案に繋がることを目指した。地方の希薄化した繋がりを再構築し、多様な人が集まるまちづくりのきっかけとして、今後も CWS について より発展的な議論や提案が必要だと考える。

【参考文献】
1）大都市政策研究機構　調査研究レポート（第６回）「日本のコワーキングスペースの拡大」（２０２２年１２月版）
2）愛知県瀬戸市に見られる窯垣の成立と現状　日本都市計画学会都市計画論文集 No. 40-5 2005

図 17　全体アイソメ図と各空間のシーン